

佐賀大学
広報誌

創刊号



学生中心の大学、
地域に根ざした大学を目指して

学長 長谷川 照

■新生佐賀大学の課題と展望

副学長(研究・企画担当) 渡辺 照男

■21世紀型大学を目指す

~「トップセブン」の誇りを~

副学長(教育・学生担当) 新富 康央

■日本一の大学病院を目指して

医学部附属病院長 十時 忠秀

COE 3冠王達成!



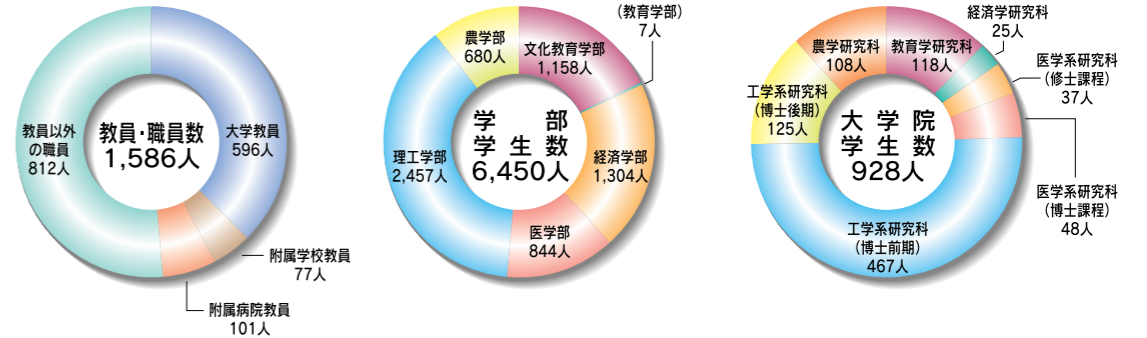
佐賀大学広報誌 創刊号

発行/佐賀大学広報委員会
発行日/平成16年2月28日

編集/広報紙編集専門委員会
ホームページ/ <http://www.saga-u.ac.jp>

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地 TEL0952(28)8407(総務課)
E-mail/sagakocho@cc.saga-u.ac.jp

FAX0952(28)8118



昨年10月1日に統合によって新しい佐賀大学が発足して5ヶ月が経過した。一息つく暇もなく本年4月の国立大学法人佐賀大学の設立を目指して教職員一同準備に追われている状況である。統合の真価は法人佐賀大学の将来に委ねることになるであろう。

ここ数年少子化の問題が取りざたされてきた。今後、若者を対象としてきた大学にその影響が顕著に現れてくる。また、高齢化社会の到来と社会の急速な進展によって、大学の教育と研究の内容は大きく変化しようとしている。例えば、エネルギー、物質、情報、環境、生命、福祉、健康等、どのテーマを取り上げても、理学・工学・農学・医学の理系と法学・文学・経済学・教育学の文系など多くの学問分野の複合的な知識を必要とする。さらに、これらのテーマは国際的な規模で解決する問題ともなっている。

大学は生涯を通じて学習し自己改革をする場であるとともに、教育研究を活性化し社会の要請に積極的に応える場として、その役割を広げなくてはならない。法人化は大学がそのような役割を担うための組織改革とも言えるであろう。

国立大学法人は財政的には従来の国立大学と変わらないが、行政的には文部科学省に代わって役員会が自ら国立大学を設置して経営する（経営協議会の新設）。また法人は、各学問の自由―学部教授会の自治―を保障しながら、画一的な国立大学を廃してそれぞれ特色を持った大学を作り上げることに努める（教育研究評議会の新設）。

経営とは大学の中長期の目標・計画を立てそれを支える財源を確保することと考える。財源の大部分は国の公費投入（運営費交付金）によって保障されるが、その額は目標・計画の達成度によって査定される仕組みになる。ただ現在の国の財政状況からみて従来の公費投入額を見込むことは難しい。し

照

佐賀大学長
長谷川



学生中心の大学、 地域に根ざした大学を目指して

かし、大学は学生と教職員を資源として良い教育と優れた研究によって知的財産を創出する宝庫である。知的財産が財産として経済的効果を発揮してきた今日、少なくともその目減り分を補う資金の工面は十分可能である。

さて、昨年1年間かけて作成してきた佐賀大学の中長期目標・計画は、現在文部科学省に提出し、関係省庁との協議段階にあるが、そこに掲げられている四つの目標を紹介して新生佐賀大学の将来を考えてみよう。

目標の第一は佐賀大学を「学生中心の大学」に作り直すことである。入学から卒業・就職まで、学園生活の全般を支援する機能を充実させる（学生支援室の拡充）。教育内容においても、理工学部・農学部日本技術者教育認定プログラムの導入、教員養成プログラムの新展開、eラーニングを活用した生涯学習プログラムの新設など学習内容の質の向上を図る（高等教育開発センターの開設）。

第二は「地域と連帯する大学」を目指す。いま日本は慢性的な景気の低迷に喘いでいる。政治、経済、学術文化のすべての面で大都市への集中―佐賀県は佐賀市に、九州各県は福岡に、各道州は関東・近畿に、関東・近畿は東京・大阪に―が進んでいる状況の中で行政改革は一極集中に拍車をかける結果となるであろう。地域社会の衰退は地方大学の衰退に繋がる。文部科学省は地域再生へ「地域づくり支援

室」を設置し、人づくりを通じて地域社会の再生・発展に総合的な支援体制の整備を今年度の方針としている。佐賀大学は平成14年、15年度の2年間にわたる地域貢献の実績に基づき地域貢献推進室の拡充を図る。

第三の目標は国際化の一層の促進である。佐賀大学は315名の留学生を擁し、大学間では32大学と、学部間では52学部・専攻と学術協定を締結している。また、大学院に国際環境科学特

別コース（英語による授業）を設けて毎年10数名の留学生に修士・博士の学位を授与している。政府の留学生10万人計画が達成され、今後は留学生プログラムの質の向上と日本人学生の海外留学の増加が奨励される。将来、アジアにおける教育と研究の拠点大学として国際的な大学間のコンソーシアム形成に貢献したい（国際貢献推進室の新設）。

第四の目標は、21世紀COE（研究教育拠点）に採用された海洋温度差発電の研究に続いて、第二、第三の研究教育拠点を形成することである。低平地にある都市の地盤と水環境の研究、海浜台地における生物生産の環境に関する研究は佐賀地域の地形・風土から生まれたもので、他には見られない豊富な研究実績を誇っている。また、平成16年4月には佐賀県の放射光施設が稼動する。この施設は日本では理化学研究所のスプリング8、高エネルギー加速器研究機構の放射光施設に次ぐ3番目の規模のもので、アジアにおける研究拠点として期待されている。佐賀大学も昨年シンクロトロン応用研究センターを設置して研究教育の準備を始めたところである。

佐賀大学は国立大学の中で学生数、教職員数から見ても、また財政的にも規模の地方大学である。しかも統合によってほとんど全ての学問分野を網羅している。ゆき届いた教育と新しい特色のある教育研究に必要な柔軟性に富んだ適切な規模である。とくに学生とコミュニケーションを緊密にする上で理想的な大きさの大学である。さらに国立大学法人の間で連携連帯することによって新しい教育研究分野への挑戦も可能になる。

21世紀に予想されるインターネット型社会では、大きなひとつの頂をもった社会を目指すよりも連なった多くの頂で構成される社会が優れていると信じていたい。

新生佐賀大学の

課題と展望

佐賀大学と佐賀医科大学の統合により新しい佐賀大学が誕生しました。このような国立大学の再編統合は、この4月に予定されています。大学法人化の流れと重なりながら動いています。言い換えますと、歴史と文化の異なる両大学が統合により獲得した長所を最大限に生かして教育・研究の活性化に取り組む、世界的基準に照らして遜色のない「教育先導大学」を構築する事が求められています。そして、その基盤に立って、大学法人佐賀大学としての組織を立ち上げ、新しい制度、考え方による大学運営を軌道に乗せることが最も重要な課題となっています。

それでは法人化により大学はどのように変わるのでしょうか？先ず第一に、これまでの国からの規制が大幅に緩和され、大学としての裁量が拡大します。そのため、教育研究組織の設置や改廃についての柔軟性が増し、財政面での機動性、弾力性が強まり、人員

配置に関する自主性が強まる、等により、大学としての自主性・自立性を発揮しやすい体制となります。

大学改革を進めるためには、基盤となる大学の規模そのものの拡大が大きな強みになります。新生佐賀大学では2つの大学の統合により医学部を含む5つの学部から構成された、名実ともに総合大学としての体制が整い、大学運営における裁量の幅が大きく広がることに注目したいと思います。勿論、法人化には問題点もありますが、当面は現実的な対応策を誤らないようにすることが大切と思っています。欠点はかりをあげつつらうのではなく、「新しく生まれ変わった佐賀大学をよくするために何が必要か」という一点から発想し、行動することが求められています。そのためにはしがらみや既得権を捨て、新しいものを目指すという意識改革に努めたいと思っています。大学法人としての自主的な運営をど

のように行つか、まさに大学としての手腕が問われています。統合を契機に始まったこれからの数年間は、新生佐賀大学の将来が託された試験の時期であると痛感しています。統合をバネに

地域に根ざした活力ある大学としての基盤づくりに励み、すべての教職員・学生が心一つにしてこの困難な時期を乗り越え、世界に大きく羽ばたく大学へと飛躍することを期待しています。



副学長(研究・企画担当)
渡辺 照男

飛翔するカササギ―新佐賀大学の学章

学章選考委員会委員長

辻 健児



「S」と「U」を組み合わせた文字を基本パターンとする図柄が目立ちました。数次にわたり絞り込んで検討しましたが、学章の原案としてふさわしい作品がありませんでした。委員会は、文化教育学部美術・工芸講座に、カササギをモチーフにした図案の作成を依頼しました。同講座の荒木博助教授が中心となって制作された複数の図案の中から、別掲のものが委員会最終的に採択され、平成16年1月の評議会で承認されて、学章として確定しました。

新学章は飛翔するカササギ、格調ある篆書体の「佐大」の文字と佐賀大学の英文表記を組み合わせ、格調高さと親しみやすさを併せ持つデザインとなっています。カササギは日本では佐賀平野に特有な鳥で、佐賀県の県鳥でもあり、国の天然記念物に指定されています。長い尾と黒と白のパターンとコントラストが個性的で美しく、本学のキャンパスにも生息し、広く親しまれており、私たちと日常的に共存しています。公募作品には「該当作なし」となりましたが、多くの方の関心を集め、応募してくださいましたことに感謝して、カササギをモチーフにした2点を優秀作品として表彰し、記念品を贈呈することにしました。

カササギの翼、尾は角度によって金属光沢のある緑・青・紫等に輝きます。これらの色と佐賀の広い空の青、穀倉地帯の緑を重ねあわせて、学章に用いられている青紫と青緑の2色をユニットとしてスクールカラーとしました。

あるいは個性で競う時代になった。S MAPが「世界に一つだけの花」のなかで歌う、オンリーワンの世界である。個性という点で、優秀性、存在感を勝ち得た佐賀大学は、それなりの責務

を負った、と言わなければならない。佐賀大学は法人化後も、「トップセブン」の誇りを元気の素(もと)に、21世紀型大学として、日々歩む。

4月以降の法人化に伴い、地方国立大学の典型(規模的にもほぼ平均)とも言える佐賀大学も、将来的な展望が見えないだけに不安は隠せない。しかし、佐賀大学には、貴重な社会的財産がある。それが、「トップセブンの大学」という呼称である。

先日、「どがね、こがね学生懇談会」という学生との対話集を開いた。その中で、学生が語った。佐賀大学は、「ユニキッズ・ゆつたら」と館・佐賀環境フォーラム」など、地域に根ざした活動をしているにもかかわらず、学生や地域の人あまり知られていないと。

実は、佐賀大学は、21世紀のモデル大学として、全国的にも注目されている大学の一つなのである。

大学の果たすべき社会的役割としては、教育・研究・地域貢献がある。一般に大学の3大機能と呼ばれる。文部科学省は、法人化以降の大学の在り方

を示すために、それぞれについてCOEと呼ばれる競争を実施した。佐賀大学は、そのすべてのコンクールをクリアした。教育COEすなわち「特色ある大学教育支援プログラム」では、「市民参画」「佐賀環境フォーラム」、「研究COEすなわち「21世紀COEプログラム」では、「海洋エネルギー」の先導的利用科学技術の構築、「地域貢献COEすなわち「地域貢献特別支援事業プログラム」では、「民学連携」推進プロジェクト(8事業)が、それぞれ採択・選定を受けた。

3つのコンクールにすべて採択・選定を受けた大学は、全国でわずかに7大学という厳しさであった。我が国の20世紀のモデル大学は、たしかに7つの旧帝大である。ナンバーワンの見方では、すべての点で、旧帝大は優位である。地方国立大学は、低位に置かれる。ところが21世紀の大学は、数量的な優位ではなく、質的な特異性、

21世紀型大学を目指す

「トップセブン」の誇りを



副学長(教育・学生担当)
新富 康央

日本一の大学病院を目指して

医学部附属病院長
十時 忠 秀



佐賀医科大学附属病院は1981年10月に現在の地で診療を開始しました。2003年10月、佐賀大学との統合により、新生佐賀大学の医学部附属病院となり、現在に至っています。当院には、全国に誇れる2つの「日本一」があります。今回はそのことを紹介いたします。

「1つ目の日本一は診療記録」です。診療記録とはいわゆる「カルテ」のことです。開院時より、当時各科で管理することが主流であった診療記録を一患者一診療記録制とし、診療記録センターという診療科とは独立した部署で診療記録の質を管理する専門スタッフによる中央管理を導入しました。

現在までに外来診療記録263,000冊、入院診療記録135,000冊を所蔵しています。これらがすべて紛失することなく保管されていることは奇跡に近いと評価されています。

記載方法についても、医師だけではなく、看護師、学生などが同一用紙に、問題指向型記録法を用いて記載していることで、患者さんの病歴、現在の状態などが総合的に把握できます。また、職種を超えた情報共有ができ、チーム医療の円滑化に役立っています。さらにその記録内容は診療情報管理士が専門的に内容の検証をしているので、当院の診療記録は、診療の質の向上及び、教育・研究にも大きく貢献しています。

もう一つの日本一は手術件数です。全国国立大学42大学附属病院の中で、病床数あたりの年間手術件数は平成9年以降常に1位を維持しつつ、他大学や文部科学省から注目を集めています。病院収入を左右する要素のうち、手術件数は、

重要なものであり、病院の経営に大きく貢献しています。

この実績は、医師、看護師、コメディカルスタッフの連携と献身的はたらきによって支えられています。

これからも「患者・医師に選ばれる病院を目指して」という病院理念の下、「日本一」がますます増えるように、職員一丸となってがんばりますので、「支援のほどよろしく」お願い申し上げます。



■新生「佐賀大学」への期待・夢は膨らむ

新しい佐賀大学の誕生を、高校教育に携わる者の一人として心からお祝い申し上げます。各専門分野が互いに協力・融合し、質的にも高度で発展的な研究・教育組織となることを目指しておられ、これまで以上に期待することや夢が膨らみます。これまでも、「海洋温度差発電」など世界的な研究成果もあり、また地元の教育、医療や産業の育成・発展に多大の貢献をされた功績は実に大きなものがあります。

大学は学術研究と教育という大きな二面性を持つています。学術研究に関しては、21世紀は生命科学（バイオサイエンス）の時代、福祉の時代といわれており、医学部と農学部との融合により、日本でも有数の「生命科学研究」のフロンティア大学となることや、医学部と理工学部の融合により、医療機器等の福祉関連機器開発の先進大学となること等も期待できます。また、佐賀特有の研究、地域と密着した研究を進めて、例えば、「市中心部の開発」等に関しては、

経済の面、農村都市としての都市計画の面、人的な流れの面などから研究を進めてはどうか。また、海洋温度差発電のような特殊性をうまく活用



佐賀県高等学校長協会会長
山崎 文夫
(佐賀県立佐賀西高等学校長)

用できないだろうか。教育に関しては、学生を国際的に有為な人材として教育することは勿論ですが、自分で物事を考え、判断し解決でき、外に向けて自信を持って自分の考えが伝えられる学生を育成してほしい。そのような卒業生が佐賀県の児童生徒の教育にも携わってくれたら大変喜ばしいことだと思います。

いずれにしても、文化教育学部、経済学部、医学部、理工学部、農学部が今まで以上に有機的に連携・融合されることにより、相互に人的・知的資源が活用され、研究・教育機能が充実されるし、大学の機能が充実・多様化され、教育の領域が広がり、学生も幅広い教育内容を学べるようになることを確信します。このことは、高校教育に携わる者として、佐賀県の高専生に、新生「佐賀大学」で学ぶことをこれまで以上に、自信をもって勤める条件がそろったことでもあります。

将来的には、歯学部、薬学部を増設し、名実ともに総合大学として、研究と教育に力を入れる大学、地域貢献への人材育成ができる大学になることを期待します。

高等学校長協会からエール

■頑張れ、新生「佐賀大学」

佐賀大学同窓会からエール

新佐賀大学の誕生おめでとございます。昨年10月、佐賀大学と佐賀医科大学の歴史にも特筆される合併記念式典に於て、長谷川学長の簡潔にして緊張感溢れるご挨拶に接し、心から安堵し身内に昂ぶる喜び、震える様な感動を抑えることが出来ませんでした。

同窓会に何か出来る訳でもありませんが、この数年、佐古先生や上原先生を煩わせ合併準備の状況説明を要請し、一喜一憂した役員会議の姿が今も一幅の夢の様です。

両大学の卒業生にとりましては無論のこと、合併の成就と新大学のスタートは県民各位にとりまして大きな関心事でした。これでやっと落ちつくべき処に落ちついたと安心していただけたのではと思えます。



佐賀大学同窓会会長
関本 健

合併による相乗効果は研究のあり方を多様化し、その分野を拡大する筈です。山川草木、都市、人間、産業、考えれば限り無い地域の問題に囲まれています。県民の期待も又大きく膨らんでおります。

地域に開かれた佐賀大学の掛け声は、山川元学長以来、楠田、高田、佐古、上原の歴代学長に引き継がれ話し合ってきました。地域貢献はよいよ本番です。

片や、IT社会はあらゆる変革の可能性を秘めています。インターネットによる講義は国境の壁を無くし、世界中の大学がその実力を競う時代です。産学協力にいたっては連日の様に企

業名や大学名が具体的に新聞紙上に出ております。大学に対する外部の評価は厳しさを増します。じっくり考えて行動するのが、走り乍ら考えるのは難しい問題です。

容赦なくネットにより情報は流れます。看板がいかに立派でも内容がどうなのかを少子化時代の受験生は考えています。COEについても世間の人は頼れる尺度として見ます。

「佐賀大学頑張れ」困難を乗り越えてこそ勝機ありとは日頃私たちが後輩に投げかけている言葉です。今、母校に対し声高に叫びたい卒業生たちの声でもあります。大学の合併は同時に全学同窓会の合併問題でもあります。従来の理工・経済・文化教育・農の4同窓会連合に医学部同窓会にも参加を要請して5

学部同窓会の連合になる予定です。母校名が消える医学部の方々の心中を察し各学部の独自性は侵さず、又近づく大学法人化にも堪えうる様な会づくりを進めております。互いに尊敬し信頼しあえる連合体を構築します。

最後になりましたが、かねて要望しておりました法学系の充実につきましては引き続きご努力いただきますようお願いいたします。

ゴールの無いマラソン、教職員皆さまの強固な意志と体力の旺ならん事を、又最も重い荷を担がれる長谷川学長のご活躍と成功を期待し、ご健勝を祈ります。

教育 COE

「市民参画(佐賀環境フォーラム)プロジェクト」

理工学部 宮島 徹
(佐賀環境フォーラム事務局長)

「佐賀環境フォーラム」には、市民と学生が共同参加する。ここでは、両者が共に学び、体験し、議論し、考察する。具体的には、①佐賀大学教官と外部講師(行政、企業、環境NGO等)によるオムニバス形式のフォーラム、②自然生態系観察やごみ処分場見学などの体験学習、③個別の環境問題について研究する「グループワークショップ」により構成され、通年で実施される。今年度で3年目であるが、①環境に関する今日的課題についての総合的・多角的考察能力、②体験による実践的理解能力、さらに、③身近な環境に関する問題発見・解決能力が得られるなど、教育効果は顕著であった。しかし、「佐賀環境フォーラム」の最大の効果は、活動を通じて様々の主体が、世代・立場を越えて理解を深めることができたことであろう。

佐賀地域は先人たちの努力によって「創られた」豊かな2次的自然に恵まれており、市民および行政はこの自然環境の保全に積極的である。これは佐賀大学の環境教育にとっての資産である。これまで佐賀大学は様々な地域貢献活動を行ってきたが、今回は、これをさらに押し進めて、佐賀市と積極的に人的交流を行った。すなわち、

運営組織である「佐賀環境フォーラム実行委員会」には佐賀大学教官と佐賀市職員が共同参加した。これは貴重な経験である。これを今後生かさなくてはならない。この実行委員会について、もう1点特筆すべきは、学生や市民のボランティアが多数参加したことである。今回の成功によって、彼らが中心的役割を果たすことによつて、素晴らしい力を発揮することが実証された。

これまでワークショップで得られた研究成果は既に佐賀市の環境行政に生かされており、今後、この成果が佐賀大学のニーズオリエンティッドな環境研究開始の契機となることを期待される。



クリークの水生生物

研究 COE

海洋エネルギーの先導的利用科学技術の構築

海洋エネルギー研究センター長 門出 政則
(グループリーダー)

＜拠点の目的＞

本拠点の目的は、21世紀の世界的な緊急課題であるエネルギーと環境問題の解決に寄与することを目的とし、海洋エネルギーの複合的高度利用技術とその利用に伴う海洋環境保全技術に関する先導的利用科学技術の構築を行うことです。さらに、これらの利用における法学的・社会的問題に関する研究とも有機的に連携を図りながら海洋エネルギー利用における学際的研究を推進する拠点形成を目指しています。特に、海洋エネルギーの中でも、約30年間佐賀大学で行われてきた海洋温度差発電を中心とし、これまでの研究資産を飛躍的に発展させ、世界最高水準の研究拠点の形成が期待されています。

＜研究拠点＞

研究グループは、センターより4名、工学系研究科5名、農学研究科2名、経済学研究科1名、文化教育学部附属教育実践総合センター1名の計13名の全学的な教官及び研究員から構成されています。2003年10月の佐賀医科大学との統合にともない、一層の全学的な学際的研究拠点形成が期待されています。

＜研究内容＞

これまでの研究において、海洋温度差発電の研究推進とともに、海洋環境観測に関する研究拠点構築において国内大学最大の調査項目数が可能な衛星データ処理装置の開発や、リチウム回収、リチウム電池、水素貯蔵・製造、海洋深層水利用、新しい工学教育、社会学などの分野で様々な卓越した成果が得られています。詳細は、センターのHPの<http://www.ioes.saga-u.ac.jp>で紹介しています。なお、本COEプロジェクトを始め海洋エネルギー研究センターの研究成果を2004年3月26日から4月4日まで国立科学博物館(東京都上野)で展示しますので、是非ご来館ください。



海洋エネルギー研究センター

文部科学省は、特に優れた取組をしている大学に対し、補助金の重点配分を行っています。それは通称COEプログラムと呼ばれていて、**先駆的で世界的な研究機関育成を目指した「21世紀COEプログラム」、地域貢献を推進する「地域貢献特別支援事業」、教育面での新しい取組を支援する「特色ある大学教育支援プログラム」**の3プログラムがあります。佐賀大学は、この3つのCOEプログラムすべてに選定され、「3冠王」を達成しました。3冠王を達成したのは、わずか7大学だけですので、大快挙といえます。大学の看板となる新活動で、大学も大いに活気づいています。

COE 3冠王達成!

地域とつなぐユニキッズ

文化教育学部附属教育実践総合センター長 大元 誠

現在、大学の地域貢献への期待が高まってきている。ユニキッズクラブは、学校完全週5日制の実施に伴う土曜日のひとときを有意義に過ごしてもらおうと、昨年度、地域貢献推進室を中心に創設された。ユニキッズクラブとは、佐賀大学が、大学キャンパスを中心にさまざまな学びや遊びを体験するプログラムで、「大学の子ども(University's Kids:つまり、ユニキッズ)となって、大いに学び遊ぶ」をモットーにしている。昨年度は、佐賀大学文化教育学部を中心とした企画が大半を占めていたが、2年目に当たる平成15年度は、佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センターが事務局を全面的に引き受け、全学的な取り組みとなり、さらに「地域とつなぐユニキッズ」として、佐賀県下の自治体と協力し、充実して実施された。

内容は、小・中・高生(主として小学生)を対象とし、「人口オーロラ、火の玉を見てみよう」「ロボット工作」「Dancer in the water」「佐賀キャンパスおもしろ植物観察」「英語であそぼう」「留学生とお話しよう」「囲碁でコミュニケーション」「少年サッカースクール」「高校生日本語・英語ディベート大会」など種類も多岐にわたり実施した。また、他の地域貢献事業や自治体との連携として、「はちがめエココミねっと」(伊万里市)、「棚田探検隊」(相知町)、「佐賀一日体験スクール」(多久市)、「からつ・ティーンズ・シンポジウム2003」(唐津市)などが実施された。実施するに当たっては、プログラム担当の諸先生やさらにそれを支える学生ボランティアの並々ならぬ努力がある。ここに感謝の意を表したい。

最後に「大学の敷居が高い」との意見がまだ聞かれる。この「汚名(?)」返上のため、さらにさまざまな企画に取り組んでいきたい。



ロボット工作

地域の資源循環活動を応援する「はちがめエココミねっと」

農学部 染谷 孝
(はちがめエココミねっと世話人)

「はちがめエココミねっと」は、佐賀大学の地域貢献事業の一つとして平成15年度からスタートしました。佐賀県には、いろいろ工夫に富んだ実践を通して、地域の有機廃棄物の資源化を進めている活動がたくさんあります。その模範的存在がNPO法人「伊万里はちがめプラン」です。これを応援して、資源循環型社会に向けたネットワーク作りを進めているのが「はちがめエココミねっと」です。これは伊万里市との共同事業で、佐賀大学の教官と学生が協力して、堆肥化施設の見学会、環境シンポジウム、環境出前授業、支援研究などを進めています。

「伊万里はちがめプラン」のユニークな点は、飲食店が率先して生ごみの収集に協力していることで、市民も市内10数カ所の「ごみステーション」に家庭ごみを集めています。これらのごみは一日1.5トンになり、これを約3ヶ月かけて堆肥化しています。できた堆肥は、レストランや道の駅で販売されるほか、地元農家の野菜畑や水田で使用され、「はちがめ」ブランドの農産物として人気です。この3月からは専用の販売所(はちがめふれあい広場)もオープンします。また、休耕田に生ごみ堆肥を入れて菜の花を栽培してナタネ油を絞る、飲食店で料理に使われています。また、廃食用油を集められ、ディーゼル燃料(BDF)に変換されて資源として活用されています。

「はちがめエココミねっと」では、より質の高い堆肥の製造技術の開発や、市民が生ごみを集めるときの男女の家事分担の問題を研究したり、BDF製造の副産物から有用成分を取り出す研究もしています。このような応援のお陰で、近いうちに生ごみの堆肥化量を倍増できそうです。そうすると、伊万里市民の出す生ごみ全量の約3割にもなります。この活動がエコビジネスとして成功すれば、県内ばかりでなく全国のとても良いお手本になるに違いありません。



堆肥にさわる子供達

相知町藤野集落における棚田の保全活動支援プロジェクト

農学部 五十嵐 勉
(事業実施世話人)

相知町との地域交流協定の締結に基づき、棚田の保全活動に取り組んでいる藤野集落での棚田保全のための支援プロジェクト事業を行なっている。主な支援プロジェクトは、①佐賀大学学生と市民による耕作放棄地の復田作業と有機栽培、②農学部附属資源循環フィールド科学教育研究センターによる循環型・環境保全型農業の実験・実習、③棚田の学校を活用した環境教育・農業体験プログラムの企画・実践、④棚田でのコミュニティビジネス・エコミュージアムの企画・立案・支援事業の推進、及び⑤2004年度に相知町で開催される全国棚田サミットの企画への協力である。

①と②については、地区から無償で貸与した耕作放棄地約8,000㎡のうち、平成15年度は約1/3を復田し、藤野特産の「夢しずく」と緑米の有機栽培、および畑での野菜の有機栽培を行なった。これらの援農活動は、農学部の学生を中心に組織した「手間講隊」である。手間講とは、かつて藤野の石積み棚田の造成時に行なわれた村人による共同作業をさし、学生・教職員・市民と地区の住民との協力による現代版「手間講」の再生を目指すものである。隊員は、荒地の開墾から棚田特有の悪条件下での畦塗り・水管理・除草作業、そして有機栽培の実験・実習に熱心に取り組んだ。この取組は、JASの有機農場の認定(平成16年3月)として実を結んだ。3月から次年度にかけては、資源循環フィールドセンターを中心に有機栽培の実験や地域貢献事業の「はちがめエココミねっと」との連携による資源循環型の棚田保全への取組を進めていく。③については、イオングループのエコクラブとの連携が実施された。④と⑤については、次年度の重点的な企画として取り組む予定である。

学生と教職員が市民も巻き込みながら、大学から地域の現場に出て、問題を共有し、地域とともにその問題の解決に取り組む「手間講隊」の活動は、地区住民や行政、および棚田保全に関わる多くの団体・地域から大きな期待を頂いた。9月に開催される棚田サミットでの活動報告は、大学の地域貢献とは何かを社会的に評価される機会となるであろう。

詳しい活動は、手間講隊のホームページ<http://higata7.ag.saga-u.ac.jp/>



復田した農地での農作業に汗を流す手間講隊の隊員

『社会生活行動支援部門』と地域貢献活動

医学部附属地域医療科学教育研究センター 齋場 三十四

当部門は、わが国の医学部に唯一設置された画期的な分野です。わが国の医学界は、高度な治療医学、救命医療を確立してきました。その反面、傷病や障害を抱えて地域で生活していくことが余儀なくされる人達も増加している現実にも直面しています。私達の生活は様々な機器・用具類によって生活が支えられていますが、傷病・障害といったハンディを持つと便利だとされる機器・用具類が、使えなかったり、より強い不便さをもたらしたりすることが起こります。この部分を技術支援によって解決したり、当初からハンディを持つ人への生活支援を目的として研究開発されるものも増加しています。この部分の支援技術を確認することが急務となっています。

テクニカルエイドといわれるこの分野(医学・看護介護学・福祉学・工学・建築学・心理学等の連携)を形成することを当部門は、まさに目的として生まれました。地域貢献事業として、公開講座『ものづくり大学』を現在開校しています。毎回120名前後の参加を得ています。医学・看護学・工学も含めて見識(姿勢保持・身体機能・運動学・看護・心理学など)を深めています。既に、食具(バリアフリー食器)家具(椅子づくり)の商品化に生かされるなど地域貢献活動の効果が現れつつあります。地域医療を担う医療従事者にもこの分野を理解して貰うことも大切な課題として取り組んでいます。少数の担当スタッフですが、空飛ぶ車椅子といわれる程元氣印の松尾清美助教と共に今後も新しい分野の確立に努力、邁進する決意です。



ストラスブルグ(仏)トラム(ノンステップLRT)

教養教育運営機構の役割と課題

教養教育運営機構長 近藤 榮造



平成15年10月に設置された教養教育運営機構の職務は、「新生佐賀大学」の教養教育の運営である。機構は、9月末日をもって廃止された「全学教育センター」の職務を引き継ぐとともに、学生の要望と社会の要請に応える「新しい教養教育」を展開することになる。

少子化を背景に進む学生の多様化と高校教育の変化への対応は不可欠である。「大学入門科目」は、大学教育への導入を図る転換教育と明確に位置づけ、実施する。新設の「地域と文明」部会は、問題発見・問題解決型の授業を展開する。社会的要請が強まっている外国語（特に「使える英語」）の教育体制を強化する。IT社会で必須な情報処理能力を向上させる。等々。

統合後・法人化後の「佐賀大学」の教養教育は、従来とは異なる二つの点に留意する。第一は、統合のメリットを活かして、改善・充実すること。第二は、新設の「高等教育開発センター」（特に、教養教育部門）と連携しながら、教養教育のあるべき姿を追求すること。中期目標・中期計画の第一ラウンドが終わるまでに、評価に耐える実績を残せるか？それは、大学の教育方針確認と、教養教育を担う教員の実践にかかっている。

突然ですが、皆さんは「NPO法人佐賀大学スーパernet」(以下、スーパernet)という団体をご存知でしょうか。平成15年3月3日に設立し、同年7月30日にNPO法人格を取得。メンバーは佐賀大学生を中心に教育、社会人と幅広い人間が所属しているこの団体は、とある先生の講義を通して「学生と教官が継続して地域に貢献できるボランティア活動や体験学習を支援すること」は出来ないだろうかという事がきっかけで設立されました。私は現在、マネージャーとしてスーパernetで活動しています。最近の活動では、鹿島の竹灯籠まつりへのボランティアや、JA佐城大和へみかん収穫の体験学習といった活動の企画・運営を行いました。そういった経験を積んでいく上で、スーパernetは、私に本当に様々な事を考えさせてくれています。「社会は私達学生に一体何を求めているのだろうか」私達学生

NPO法人佐賀大学スーパernetでの活動を通して



ペットボトルリサイクル作業

はどういった形で社会に貢献できるのか、「ボランティアに範囲はあるのだろうか」、「あるのなら一体どこまでなのだろうか」、「こういった事が次から次へと頭の中を駆け巡りながら動きまわっている毎日です。とても有意義な時間を過ごせています。

ところで、去る平成15年10月1日に文化教育学部、経済学部、医学部、理工学部、農学部の5学部からなる新生「佐賀大学」が誕生しました。来年度には独立法人化も行われます。佐賀大学は事務も教官も新たな体制に向けて準備をされています。今こそ私達学生も何かしなくてはいけないのではないのでしょうか。事務の方、教官、学生の3者が互いに切磋琢磨して新生「佐賀大学」を盛り上げていけたらと思います。また、スーパernetでの活動がその過程の一部になれるよう、これからも頑張ります。

経済学部
経営・法律課程法務管理コース
中村英隆

テニスクラブの紹介

佐賀大学ローンテニスクラブ

佐賀大学教職員ローンテニスクラブ会長 西田 新一



若い頃、「野球、水泳、マラソン等」、スポーツは一応何でも経験してきたけれども、団体スポーツは、いつの間にかメンバーが一人減り、二人減りして…、個人スポーツは根気が続かなくて…、何時の間にやらスポーツとは縁が切れて、幾年月か経過。最近、とくに「食欲は減退していないが、動くのは面倒だ」、「近頃、体力がめっきり落ちて…」、「どうも、下腹のせり出しが気になって」というような方はいらっしゃるいませんか。「健全なる精神は、健全なる肉体に宿る」。身体の調子が悪くては、良い考えも浮かばないし、仕事への熱意も薄れ勝ちになります。体調が優れないからと医者に行っても、「運動不足」を指摘された場合も少なくないでしょう。

スポーツの種類は、極めてたくさんあります。一般に、団体スポーツの場合は誰か熱心な幹事役がいないと、いつの間にかすたれてしまう傾向にあります。若者男女、年齢を問わずに、少人数でもたくさんいても、試合でなくとも練習だけでも結構楽しめるスポーツの一つがテニスです。もっとも、初心者の場合、ある程度うまくなるまでは、多少ハードルを越えることが要求されますが、その期間を乗り越えさえすれば、いわゆる「テニキチ」になることは請け合いです。テニスでかいた汗を風呂で流してから「飲むビールの味は、また格別」です。ぜひ、思いきって、テニスコートにおみえ下さい。写真は、昨年11月、佐賀医科大学（当時）との対抗戦で撮影したもの。なお、佐賀医科大学（現、佐賀大学医学部）とは、昭和62年から年1回の割合で親睦の対抗戦を続けており、現在に至っています。

新刊紹介

Webテキスト「材料強度学」

監修：西田 新一（理工学部教授）、著作・製作：科学技術振興事業団、企画・製作：株式会社学習研究社（2003年発行）、となっているが、内容は西田新一教授がすでに発行している著書のうち、機械・機器破損原因と対策（1986）、日刊工業新聞社、その英文版 Failure Analysis in Engineering Applications（1992）、Butterworth Heinemann Co. Ltd. UK. およびフラクトグラフィと破面解析写真集（1998）、総合技術センター等をベースにして、加筆・編集し、ウェブテキスト用にまとめあげたもの。全体は、プロの女性によるナレーションおよびイラスト（動画）で構成され、かなり分かりやすく説明されている。内容は、全12レッスンからなり、1レッスンごとに理解度を確かめるためのFAQなる設問形式が設けられ、さらに、専門用語については、用語集で分かりやすく解説されているので、「大学工学系学部以上、材料力学の基礎的な知識を前提としている」との前置きがあるものの、ズブの素人でもある程度は理解できると考えられます。なお、本ウェブテキストは、1分野1名（共著可）の原則のもとに、科学技術振興事業団が企画し、「材料強度学」の分野で著者に白羽の矢が立てられ、このほど完成に至ったものである。http://weblearningplaza.jst.go.jp/ にアクセスすればご覧になれます。

編集後記

新生「佐賀大学」の広報誌「創刊号」をお届けいたします。昨年10月に佐賀大学と佐賀医科大学が統合し、すべてが新しく生まれ変わる中で、広報誌も新たな編集方針で取り組み、新しい大学像を求めて飛躍しようとする佐賀大学にふさわしい紙面づくりをいたしました。旧来の内輪向けの広報紙タイプから脱し、佐大の良さを外に向かつてアピールできるようなマガジントイプを目指しています。誌名も、これまでの「広報佐賀大学」という官報的な堅い名称を棄て、「かちがらす」と命名しました。これは、新学章が佐賀の県鳥である「カササギ」を図案化したものと決定されましたので、誌名もそれに従って、「カササギ」の愛称である「かちがらす」としました。カチガラス同様、新生佐大も多くの人々にとって、愛される大学になればという願いが込められています。

「創刊号」は、新体制を支えるトップの方々メッセージと、いよいよ本年4月から導入される国立大学法人化に向けて、COEなどの新しい取り組みを始めていく活動の様子を紹介するなど、佐大の新たな息吹を盛り込んでいます。素人集団でも限られた時間で制作しましたので、すべてが不十分ですが、古いものから脱皮しようとしている編集委員の意気込みを感じてほしいと思います。皆様のご要望に応えられるような魅力ある紙面作りを目指しておりますので、忌憚のないご意見やご要望をお寄せください。

（広報紙編集専門委員会委員長 早瀬博範）